
物狂いの午後は

二姫諒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物狂いの午後は

【ZPDF】

Z6572F

【作者名】

一姫諒

【あらすじ】

純粹なヒロインとおつかない世界のお話。

・プロローグ

真正面に臨んでいる駅舎の向こうに赤黒さの予感があった。

ということは帰宅時間に少し届かないぐらいだろ。自動改札があるのが奇跡だと思えるぐらいの田舎の駅である。駅口から吐き出される人影も少ない。

洋平たちが無為な一時間半ほどを過ぎし、これからもしばらく拘束される予定のこの駅前広場を除けば、周辺の大部分を占める更地に長年放置されてどこまでも生い茂る雑草が見渡す限り勢力を拡大し、草原のようになつていてる。

ぽつん、ぽつんと点在する一軒家はすべて農家なんじゃないかと思えるあたりさまである。

これならば一応は安心だろ。知人とばったり、という可能性は皆無ではないが、限りなくゼロだ。

しかし、である。

問題がひとつ。

洋平は横目でおそるおそる、傍らで小さな体いつぱいに募金箱を抱え込んでいる少女の顔を覗いた。

……ヤバい。

顔には出してないが、かなりキてている。

一見すると無表情だが、よくよく見れば。

M属性を持つた男子なら一瞥されただけで落ちると評判の攻撃的で釣りあがつた目は普段より消費税分ほどその傾斜を大きくし、常に頃なら立て板に鉄砲水を打ち出したように入の悪口を生産する、見た目だけは上品な口は真一文字に閉じられている。

そして、いつもならふりふりふりふり邪魔なぐらい揺れる金髪のツインテールも、今は心もち重苦しい。

……まあ、仕方ない。

今回ばかりは自分が悪かつた、と思つ。

ここは素直に謝つておくべきだらう。そうだ、人間素直が一番だ。誠意を持つて謝罪すれば、きっと性格が知恵の輪みたいに捻じ曲がつてることもきっと許してくれるだらう。

どう猛な野獣だって、真摯な態度で接すれば心を開いてくれるつていうしな。

決心すると、洋平はわざとらしく、一ほん、と咳払い。

「……なあ三島」

「あ、今作業が忙しいから、十年ぐらい待つてもられる?」

取り付く島もなかつた。

更に三十分が経過。
暇の一言である。

夕日のオレンジが洋平たちを静かに包む。いい加減腰は痛いし、少し汗ばんできたシャツが不快だ。

相変わらず傍らの三島は言葉を発しないが、先程からあからさまにこっちを睨んでくるようになった。

たぶん完全シカト作戦だとあまりにも暇すぎたんだらう。学校では天才と持て囃されているくせに、分かりやすい奴だ。

こちらに向けられている熱烈な視線を涼しい顔でスルーし続けるのもそろそろ限界だが、もう暫くの辛抱だらう。まず間違いなく向こうが先に我慢できなくなるはずだ。

少し前に電車が駅に止まつたようだが、誰かが下りてくる様子はない。静かなものである。実際ここに募金箱を持って仁王立ちを始めてから、人よりもネコのほうが出会いが多い。

「……ああっ！ もう！ お前のせいよ！」

ほぼ読み通りのタイミングで三島が口を開いた。

「なんで私がお前と一緒にこんな猫しかいないような駅で募金活動しなきやなんないわけ！？」

三島美野里は背がちっちゃめで、大体洋平の胸の辺りに頭のてっぺんがあるぐらい。その三島が自分よりよっぽど背の高い洋平を、

ひるむことなく真正面から（真下から？）睨み付けているのは少し
惚れ惚れとするものがある。

「猫は嫌いかイ？」

「茶化すなっ！ お前が休日の予定が開いてるなんて無防備」の上

ないこと言わなければこんなことにはならなかつたのよ！？」

「だから謝つてるじやねーか

「謝つてないわよっ！」

…… そういえば謝つてなかつた。

「……ごめんなさい。俺が悪かつたです」

「謝つて済む問題かっ！」

「どうすりやいいんだよっ！」

口論を続ける一人以外には、依然として人影は見当たらぬ。

そして一人が持つ四角いふたつの募金箱だけが、墨で塗つたよう
な黒い影を落としている。

「そんなわけで、俺は今日宝仙さんに告白する!」

真顔でそんなことを言い放つたので、あまり脳を使つてないぽかんとした顔を、読みふけついていた週刊の漫画雑誌から土屋の顔へと向けた。

だがそれも一秒ほどの間のこと。友人である土屋の発言が良く噛み砕かれて頭に届いたころには、すでに興味は失われていた。

「どんなわけだか知らんが、『愁傷様だ』

体を机から横に向けて、足を組んで漫画を読み続けながら、適当に返事をする。

「なんだよ無反応だなあ。洋平、俺はマジだぜ?」「知つてる

まだ二人しかいない教室の窓から朝日が兆している。空の青は澄明で、雲は数日前からストライキに入っている。こんな爽やかな日に、青春らしい爽やかな話をする一見爽やかな青年。

そんな彼を真面目に相手しないほどには、洋平は土屋と長い付き合いだ。

なにせ土屋という男は、一ヶ月に一度は今のような告白宣言を行うのが定例化している人間だ。それでいて告白成功率はインド人が発明した数である。校庭で行われる彼のストレートな告白は、すでに学年中の見世物と化している。

それを知らないではあるまいに、少しでも可能性があると思つているのか、ピエロを演じるのもまんざらでもないのか、いまだに懲りず女性へのお誘いを実行しているなんとも理解しがたい男なのだ、土屋は。

しかも今回は、言うに事欠いてクラスや学年を通り越して学校のアイドル、宝仙涼子へ告白するときだ。

別にそれが悪いとは言わないが、愛とか恋とか甘酸っぱい苺とか、

そういう浮ついたものを嫌つ俺はそんなことを打ち明けても黙りと
いうものである。

「なんだよ、つれねえ奴だなあ！ お前そんななんじや、一生甘酸つ

ぱい苺な青春を送りずに墓場行きだ！」

「それは怖いな、じやあ十屋に彼女ができるから焦り始めた」と
洋平が答へる。

「相変わらず漫画で田を向けながら筆をさす。

「あ、すげえ富樫今回書こう」と

「へい、今見てやがれ洋平！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6572f/>

物狂いの午後は

2010年10月10日22時39分発行